

結社誌を訪ねて

中原 修子

涅槃西風母へとすべるすべり台

松尾 隆信

「松の花」六月号

涅槃会の季節になると柔らかい西風が吹き始めます。西の方角は、仏様の入滅された方角であると同時に、魂の帰る方角でもあります。幼い子供が嬉しそうに、下で待つ母の方へ滑っていくという様子だけを表しているだけではないように感じます。滑り台というものは不思議な遊具です。重力という目に見えない力によって人は落ちてゆくことに抗うことはできません。生きている現実の自分が亡き母の方へゆっくり動いていくのです。この場合、滑り台の下に居るのは力強い父ではなく、か弱いながら永遠の象徴である母の方が自然であると考えます。一見すると異質に見える宗教語と遊具、母という個人的な存在、それらを絶妙に融合させ魂の行方までも連想させる深い詩情の作品です。

唇の花びらも食べ昼餉終ふ

中西 夕紀

「都市」六月号

芳春の桜の季節です。満開の花の下、中西氏は、綺麗に盛り付けられた花見弁当を、皆と一緒に愛でながら頂いておられます。花霞のなかでゆったりとした時間を持つことは至福の極み

です。軽い東風が木々の間を通り過ぎ、飛花がたまたま作者の口元に舞い降りてきました。少しユーモラスな春の一場面です。ただ、中西氏はその花弁一枚も昼食の一部であるとして恭しく頂きます。花を愛で、偶然花びらが口元に降ってきて、それを食べたという出来事さえ自然の一部だと受け入れておられます。自然と人間の共生を柔らかく受け入れる詩情が滲み出ている作品です。

また、この句を拝見して、真つ先に思い浮かんだのが、池田理代子氏の有名な「ベルサイユのばら」の一場面です。フランス革命前、公爵家の跡取りである男装の麗人オスカルが薔薇の花びらを口に運びます。求婚者に「あなたは薔薇の花びらを食べるのですか。」と訊かれ「いけないか。」と言い放つ、夜の庭園の一場面です。懐かしい小・中学時代の記憶までも呼び起こしていただきました。

辿りきてワーズワースの門に薔薇

石井 滄星

「秋麗」七月号

日本のあちこちにワーズワースというお店や小さなホテルを見かけます。しかし、固有名詞のワーズワースといえ、十八世紀末から十九世紀に活躍した英国のロマン派の詩人の名前です。それまで合理的な理性主義、偏重主義が幅を利かせていた文学界に対して、ロマン派の詩人たちには恋愛賛美や中世への憧憬を高らかに掲げ、芳しい作品を紡いできました。W. ブレイクや、バイロンなどと共に最も有名なものが、このワーズワースです。彼は英国北部の湖水地方というこの世のものとは思われないくらい美しい丘陵地帯で生まれ、その風景に神秘性を見出しました。彼にと

って、風景は単なる風景ではなく、人間の魂と深く結びついた崇高な存在でした。我々日本人の自然観にも相通じるため、国内にも愛好者は多くいます。日本から湖水地方へは飛行機や電車を乗り継いで、丸々一日以上かかります。「辿りきて」という表現から、地球の反対側への道のりはとても遠かったと分かります。しかしこの地は、日本のような灌木や藪とは全く違う植生で、低木や牧草地や水生植物などのナシヨナルトラストの大地です。ここに、ワーズワースが二十九歳の時から十年近く過ごした「ダブ・コテージ（鳩の館）」があります。石灰塗の真っ白な二階建ての家は文学館として常に一般公開されています。石井氏がこの地を訪問した時、英国の国花である薔薇が薄紅色に咲き誇っていました。何百年も持ちこたえた漆喰の壁に美しい花が彩りを添えています。英国が世界に誇る詩人のかつての住まいを眺める時、万人の胸に深い感慨が湧きおこります。周りの垣根越しに、ピーターラビットが日本から来た俳人をもの珍しそうに眺めているかもしれません。

行く春や母のノートの醤油染み

大山 文字

「火星」七月号

「行く春」という季語は、過ぎ去っていく春の気配だけを示しているのではなく、失われゆくもの、失ったものへの惜別の情をも湛えています。作者は「母のノート」を胸に、亡き母上をしんみり偲んでおられます。母上への思いと、行く春という季語がびたりと調和しています。時の移ろいという余韻の中で、ノートに

残された「醤油染み」という極めて生活に根ざしたものが、かつての母の存在を大きく示しています。遺品のノートには、料理の覚え書、家事の記録、簡単な日記などが記されているのでしょすが、だんだん変色していきます。母を失った悲しみは深まるばかりですが、そこに何の言葉も付け加えないということによって、却って抑制のきいた母上への恋慕を強く感じます。行く春の脆さと、母のノートの染みという何気ない物象を通して、記憶と季節、情感と時間が穏やかに交差し、母への追慕の念が深くなります。

花冷の天使向き合ふラテアート

五島 節子

「火星」七月号

春になって寒さも緩み、桜を愛でる頃になりました。しかし時折、肌寒い日々が戻ることもあります。花冷えを逃れて、コーヒー専門店に入りました。温かいカフェラテを注文すると、目の前にそっと美しいカップが置かれます。コーヒーの上には泡立てたミルクを使って、向かい合った天使たちの姿が描かれています。天使の羽の白く滑らかなアートの色がきれいです。飲んでしまえばその形が崩れるので、作者はその天使の姿を愛で、ゆっくりと午後ひとときを楽しめます。時間が立てばコーヒーの熱のために、天使の姿は、跡形もなく消えてしまおうと考えると少し切なくもあります。五島氏はもしかしたら、他のどなたかと一緒にカフェラテを注文されたのかも知れません。向かい合って座り、ミルクの芸術を楽しむ仲の良いお二人の姿もまた天使のようです。

（筆者住所 〒310-0853 茨城県水戸市平須町一八二八―五七二）